

「人間性」の向上をめざして

— ある教養ゼミでの試み —

横 溝 紳一郎

Toward the Development of Teacher's Personality:

— An Attempt in a Class of 'Introductory Seminar for Freshman' —

Shinichiro YOKOMIZO

1. はじめに

横溝(2002)では、「いい教師」であるための要素、すなわち「資質」が「人間性」「専門性」「自己教育力」という3本の大きな柱で捉えられ、教師の努力・研鑽(すなわち自己教育)によって、資質を向上させていくことが可能であると述べた。その上で、「専門性」と「自己教育力」を向上させるための方法を紹介した。しかしながら、残る「人間性」については、以下の記述をするにとどまっていた。

残るは「人間性」である。「人間性」を磨き上げる方法は数限りなくあると考えられるが、本稿ではその一つを紹介する。縫部(2001a: 23)は、日本語教師が備えるべき資質として「自己を知ること」と「他者と交流すること」の重要性を強調している。「人間性」の中でも、これらの要素は教師にとって特に大切な要素であると考えられる。これらの要素を伸ばして磨き機会を提供するのが、「構成的グループ・エンカウンター」である。(中略)エクササイズに参加することで、上記の「人間性」を磨き上げることが可能になる(p.56)。

教師育成のカリキュラムの中に「人間性」向上のための授業や活動が組み込まれることは稀であり、日常生活の中で各自が自覚を持って向上させていくように指導する程度にとどまっているのが現状である。本稿の筆者(以下、筆者)自身もそのような取り組みを、これと言ってしてこなかったようである。教師にとって「人間性」が必要不可欠な資質であり、しかもその向上が努力・研鑽によって可能であるという事実を知っているながら、教師教育者がそのことに正面から取り組まないのは無責任であると言わざるを得ない。本稿は、日本語教師にとって重要な資質のひとつ「人間性」の向上をめざして、構成的グループ・エンカウンターを導入した「教養ゼミ」の実践報告である。

2. 構成的グループ・エンカウンターとは？

1960年代半ばに國分康孝氏により紹介・提唱された「構成的グループ・エンカウンター」¹⁾とは、「ありたいようなあり方を模索する能率的な方法として、エクササイズという誘発剤とグループの教育機能を活用したサイコエジュケーション(心理教育)と定義され、具体的な方法としては、リーダーが用意したプログラムに沿ってエクササイズを実施する形で進められる。参加者はエクササイズを通して体験したこと、感じたことを分かち合う(シェアリング)。こうした一連の体験の中で、本音と本音を交流し合う(岡田 1999: 11)」のである。エクササイズの内容によって体験できるものは異なっており、各エクササイズには、以下の6つのうちの1つまたは2つが、その目標として設定されている(岡田 1997: 12)。

1. 自己理解
2. 他者理解
3. 自己受容
4. 信頼体験
5. 感受性の促進
6. 自己主張

構成的グループ・エンカウンターは、日本各地の小学校・中学校・高等学校などで既に広く活用されているのであるが、大学生・大学院生・社会人等にも活用可能である(横溝 2002: 56)。

3. 授業内容

3.1. 教養ゼミとは？

構成的グループ・エンカウンターを導入した「教養ゼミ」とは、教養的教育の一環として学部1年生(1 Semester)を対象に開講される授業である。大学生活での自主的な学びへの動機付けを高め、科学的な思考法と適切な自己表現能力を育てることを目標とし、週1回セミナー形式で実施される(平成14年度広島大学学生便覧 p.14 より)。筆者が属する

日本語教育系コースの場合、毎年4名の教官が分担して(すなわち、4つのゼミを開講して)実施されている。ゼミの実施方法は各教官に一任されており、筆者は、上述の「人間性」向上のためにこの教養ゼミを活用することにした。各教養ゼミについての概要説明後、参加を希望するゼミについて調査した結果、筆者のゼミには12名が参加することとなった。ゼミの概要説明は、以下の通りであった。

【テーマ】人間理解とコミュニケーション

【概要】日本語教育の現場は、教師と学習者そして学習者同士の「人と人のぶつかりあい」の場である。学習者の日本語学習を支援していく日本語教師には、日本語や日本語の教え方の知識以外に、教師としての自分を深く理解すること、自分にとって他人である学習者をできるだけ理解すること、自分と学習者の間だけでなく学習者間にも信頼関係を構築すること等の「人間を理解し、それをより良き方へと方向づける能力」が求められる。本教養ゼミは、それらの能力の発達を、「構成的グループ・エンカウンター (structured group encounter)」の導入により図るものである。本教養ゼミ参加者は、毎週の活動に積極的に参画することにより、21世紀の日本語教師に求められる「感性のやわらかさ」を発展させていく。

3.2. 具体的な授業内容

教養ゼミで実施した教室活動を、それぞれ以下に紹介する(実施場所は、筆者のオフィス)。

3.2.1. オリエンテーション

学期初めのゼミは、「自己紹介」から始まった。自分の名前、趣味、故郷の特徴(セールスポイント)、自分と日本語教育・日本語・外国人との接点などについて、1人5分間語り、質問時間を2分設けた(BGMとして、イージー・リスニングの曲を流していた)。全員終了後、筆者も自分自身について語った。その後、このゼミの目標を上記の概要に基づいて確認した上で、B5の内省ノートを購入し、「授業中考えたこと・気づいたこと・感じたことなどを、自分の言葉で書く」ように指示した。最後に、内省ノートを通じて、各ゼミ生と筆者の間で意見交換・質問への回答等が行われることを伝え、毎週提出するように指示した。

3.2.2. 自己理解を目指した活動

富士盛(1999)による、「6人の人生」を実施した。ワークシートに書かれた6人の男女の生き方を読んで、好きな順位とその理由を記入し、4名のグ

ループで記入したものを述べ合う。述べ合ってから共有した後、「～らしさ」とは何か、それとどう付き合っていくのか、などについて話し合った。

3.2.3. 自己理解と自己受容を目指した活動

「人生を意識しよう」活動を実施した。この活動は、「生まれてからこれまでの出来事やそれに伴う感情を振り返る一方、将来の出来事を考えることによって、長期的な視点で人生を捉えること」そして「人生に対する肯定的な態度を捉えること」を、その狙いとする(鈴木 1999)。各参加者が自分の人生について、横軸に時間の流れ(自らのこれまでの人生と今後の人生での出来事)、縦軸に感情の起伏を書いて「感情曲線」を完成させ、語り合う形を採る。

また、「私の親しみやすさは？」活動も実施した。より良い人間関係を作っていくという社会生活を営む場合に必要とされる「社会的知能」の度合いをあらわす、「EQ(情動指数)」についての60問の質問に答え、各参加者同士、それぞれの結果を共有しあう。EQの6領域「共感性」「自己認知力」「自己統制力」「粘り強さ」「柔軟性」「楽観性」で自分がどの程度の数値を有しているかを確認することで、「人の身になったり、察しがよかったり、打てば響くようになったりすることの意味を考える」ことを、その狙いとする(大串 1999)。

3.2.4. 自己理解と他者理解を目指した活動

「支えられている私」活動を実施した。この活動は、「人間は自分ひとりの力で生きていると思いがちであるが、私たちの人生は様々な人たちの援助の上に成り立っているという事実気づき、支えられている自分の存在を理解すること」を、その狙いとする(飯野 1999)。ペアを作り、「あなたは、いつ、誰に、どんなことでお世話になりましたか」と各自10分ずつ何度も聞きあい、その感想を共有する。その後、「お世話になった人に、どんな形でお返しをしようと思っているのか」などについて、振り返り用紙に記入するという形を採る。

また、自己と他者の関係を理解するために「ジョハリの窓モデル」を紹介し、ジョハリの窓モデルの中の「開かれた窓(自分も他人も知っている領域)」の、自己開示による拡大が、自己と他者のリレーションの深まりにつながることを述べた²⁾。

加えて、「聞いてもらえる喜び」活動も実施した。聞き手役が拒絶的な態度及び受容的な態度で話し手の話を聴き、その違いを体験することで、「聞いてもらえる喜びを実感し、聞く喜びを味わうこと」そ

して、そのことが「相手に対する好意の念と信頼関係を生む」事実を実感することができる（足立 1999）。

「聞いてもらえる喜び」活動の発展形として、協同成長（Cooperative Development）の「理解確認」及び「焦点化」も実施した³⁾。

更に、「照れずにほめジョーズ」活動を一部修正して実施した。まずは参加者全員が「自分のよいところ」「あまり好きではないところ」を書き出す。その後、各参加者に対して、残りの参加者が「その人のよいところ」をひとつずつ述べていく（合計11個の「よいところ」を言ってもらえることになる）。上記のプロセスが全員分終了した後、「他の人からよいところを言われてどう感じたか」などを振り返り用紙に記入する。「他者からの承認により自尊感情を高め、相手への好意の念を育てることで、相互の自己肯定感を高める（大池 1999）」ことを、その狙いとする。

自己への肯定的感情を高める活動として、「求人広告」も実施した。「求む！21世紀のリーダー」という求人広告の応募条件に当てはまる自分のセールスポイントを選んで、各参加者が自分を積極的にアピールする。また、ペアとなっているパートナーは、その参加者の自己アピールで足りないと思われる点を推薦文として補足する。自己アピール文と推薦文が書かれた、各参加者の応募用紙を張り出し、それを全員で眺めた上で、各自自分のよいところについて考える（國分 1999b）。

3.2.5. 他者理解を目指した活動

「ボランティアシップ」を実施した。各参加者が行ってきたボランティア行為を記入した後、「ボランティアシップとは、社会の中で支え合いを実現し、それによってお互いが励まされ、幸せな気持ちで生きていけることを願って行動すること」という記述と比較し、各自の行為がそれに当たるかどうかを話し合う活動である（高野 1997）。ボランティア活動に関わろうとする気持ちや行動が各自にある事実を知ることと、お互いの存在の大切さを確認することを、その狙いとする。

3.3. その他の教室活動

上記のエクササイズを核として教養ゼミは運営されてきたのであるが、構成的グループ・エンカウンターとは直接的に関係のない活動も、「日本語教師としての人間性の向上」のため必要であろうという観点から、取り入れられた。『外国人留学生とのコミュニケーション・ハンドブック：トラブルから学ぶ異文化理解』（大橋他 1992）の中で紹介された、

「異文化間で生じた事件・誤解の事例」の原因について、各参加者が考え意見を交換し、同書による原因の解釈及び対処法を読んだ上で、事例が取り上げているテーマについて話し合った。「言語行動」「配慮」「契約（約束）観」「偏見」「人間関係の作り方」「言葉と思考」「友人観」「学習スタイル」「上下関係」「宗教観」「時間感覚」「集団行動」などのテーマを取り上げた事例を、話し合いのため採用した。

3.4. 教室活動の傾向

以上挙げた教室活動は、「人間性」のうちでも「自己理解」「自己受容」「他者理解」に焦点を当てたものであると考えられる。これは人間性の中でもこの3つを重要視している、筆者自身の教師としてのビリーフの現れであろう。筆者は、教師には自己受容が必要であるという國分（1982：59）の主張に共鳴している。國分は次のように述べている。

自分を受け入れるとは、自己嫌悪をもつなということである。自己嫌悪の強い人ほど他者嫌悪も強いのである。教師は人に接する職業であるから、「人好き」でなくては勤まらない。

他者である学習者を理解し、その理解を授業に生かしていかなければならない教師には、まず自分自身を理解し、その自分をありのままの形で受容することが求められる。自己の受容は、他者の（自分とは異なるであろう）物の見方・考え方や行動を受容することにつながる。学習者が外国人である日本語教師の場合は、高い「他者理解」能力が必要不可欠であると筆者は考えており、その思いが上記の活動の選択に結びついていると考えられる。

3.5. 評価

教養ゼミの評価は、内省ノート・積極的な授業参加・課題レポートに基づく総合的な評価であった。課題レポートは、以下のような内容であった。

- ・課題図書『運命を変える成功法則111のヒント』と『続アメリカインディアンの教え』を読む。
- ・どちらかの本または両方の本に書かれてある内容（自分の心に残った部分／引っ掛かった部分など）に基づいて、自分自身について色々考えてみる（分析する）。
- ・考えたこと／分析したことをA4の用紙にタイプする（4,000字プラスマイナス1,000字程度）。
- ・その下に、今学期の教養ゼミを通じて「学んだこと」を1,000字程度でタイプする。
- ・「考えたこと／分析したこと」と「学んだこと」をタイプしたA4用紙を提出する。

課題図書を選定は、上述の2書が異なる価値観に基づく生き方を主張していることによる。すなわち『運命を変える111のヒント』（植西 1988）が「ポジティブ・マインドの保持により、積極的に人生を切り開いていこう」という、積極思考の習慣化そしてその結果としての成功のために今できることを数多く紹介している一方で、『続アメリカンインディアンの教え』（加藤 1993）は「こだわり・非建設的な考えから解放されて、自分らしく前向きに生きていこう」という、マイペースで確実な変化をもたらす心構えを紹介しているのである。このように異なる2書の内容に基づいて色々と考えて、学期を通して大きなテーマであった「自己理解」と「自己受容」が更に深まることを期待しての、図書選定であった。

4. 調査結果

上述の課題レポートの「今学期の教養ゼミを通じて学んだこと」の中のゼミ生の記述に基づき、「人間性」の向上を目指した本教養ゼミの実践結果を、以下分析・考察していく。

4.1. 各教室活動についてのコメント

4.1.1. 「私の親しみやすさは？」について

EQテストによる、自己理解と自己受容の向上を報告するコメントがあった。

- ・中でも、EQテストは私に衝撃を与えた。（中略）このように、新たな自分を見つけ出すことによって、「今まで自分を知っていたつもり」だったというのと同時に、「まだ自分には開拓の余地があるし、自分はこんなものじゃない」と思えるようになった。きっと、私が自分のことを好きになれたのだ。自分を見つめなおすことによって、自分というものにますます磨きをかけるチャンスになるのだと考える。（ゼミ生 H）

4.1.2. 「人生を意識しよう」について

長期的な視点で人生を捉えることの大切さへの気づきを表すコメントがあった。

- ・自分の一生の幸福度をグラフにし、みんなと説明し合った授業があった。それで分かったのが、良いことがあると次には悪いことが待っていることが多く、人生に波は付き物だということだ。もちろん良いことが続けばいいのだが、悪くなったときに、それをどれだけ良い方向に向かわせようとするのが大切である。将来がどうなるのかは分からないが、今できることをしっかり

やれば、後悔しないような結果がついてくると思う。（ゼミ生 E）

- ・例えば過去を振り返ったときは今まで自分を支えてくれた人の温かき、すばらしい出会いに気付くことができた。それは人生を深く深く考えるきっかけであった。（ゼミ生 D）

4.1.3. 「照れずにほめジョーズ」及び「求人広告」について

相互の自己肯定感の大切さについて述べたコメントがあった。

- ・まず、自分が相手のよいところを伝え、相手が自分のよいところを伝えてくれる、というその行為は、お互いに非常に気持ちのよいものであった。親しくなると、普段は照れくさくでなかなか言えないものなので、よい経験ができたと思う。相手が自分のよいところを言ってくると、相手が自分に好意を持ってきているのだということがわかるし、相手が自分を認めてくれたのだと知ることができて、本当にうれしい気持ちになる。そうなる、自分も相手のことが好きになり、お互いの関係が非常によく。これは、人間関係において最も大切なことなのではないかと思う。人と付き合う中で、相手の嫌なところばかりが目につくこともあるかもしれないが、そのようなときも、相手のよいところを見つけようとするのできる人になりたいと思うし、皆にそのような人であってほしいと思う。（ゼミ生 K）
- ・自己尊厳の授業においては、自分自身でも気付いていないような私の長所を指摘してもらった。自分が思っている自分とは違う自分を発見できた授業だった。これから四年間ともに学ぶ仲間の長所も見つけていこうと思う。（ゼミ生 E）

4.1.4. 「聞いてもらえる喜び」について

コミュニケーションにおける聞き手の役割の重要性についてのコメントがあった。

- ・話をするとき、それを楽しいものにするためするためには、聞き手のポジションが非常に重要になるようだ。聞き手の態度次第で話し手の気分もよくなり、話したいと思うようになる。会話の雰囲気や左右する役割を聞き手は担っている。（ゼミ生 E）

4.1.5. 内省ノートについて

学期末に内省ノートを読み返してみても、その内容に関して当惑したというコメントがあった。

- ・ゼミを振り返ってノートを読み直すと、おかし

なことがいっぱい書いてあった。勢いに任せて書いたのだろうか、よく自分でこんなことを書いたと思う。(ゼミ生 I)

内省ノートへの記入が、自己の思考活動の深まりに貢献したというコメントがあった。

- ・毎回の授業では自分の意見を整理したり、それを他人の意見を理解した上で比較したりする中から多くの発見があった。また友達の意見する姿やコメントの内容は、自分にまだ足りないところや訓練しなければならないところを再認識させてくれた。そういった発見や再認識をさらに自分の中で分析して「自省(内省)ノート」にまとめたことも、考えたことを整理するという点で非常に役立つ作業であった。ノートを読み返してみると、自省というその名の通り自分を大いに省みたノートだったなと思う。(ゼミ生 D)

4.1.6. その他

いくつかの活動についてのコメントをまとめている記述があった。

- ・コミュニケーションのとり方(傾聴)や国際理解のところでは、人と上手につきあうために必要な心の柔軟性、相手の立場に立ってみることの重要性を自分なりに考えた。他の専門的教養科目では学べなかったことを、少人数での話し合いの中で学べたことはとてもラッキーだった。他にも自己受容や「～らしさ」についてなど、哲学をかじったようなテーマ(=自分・他人を考えるテーマ)は、私に日々を見つめ直す貴重な機会を与えてくれた。(ゼミ生 D)
- ・人のいいところを探すことや、異文化での心理のこと、効果的な話の聞き方・相槌の極意まで、今まで誰も教えてくれなかったことを学べました。それをを用いて人と話をしていくと、相手もたくさん話をしてくれるので、私はいま多くの親しい友達を作っています。(ゼミ生 G)

4.2. 「一番学んだこと」についてのコメント

「教養ゼミで学んだことを書く」という課題であったので、「私が学んだことは～であった」という記述が少なくなかった。以下、その内容別にコメントを紹介していく。

4.2.1. 「考えること」を学んだ

- ・教養ゼミで学んだことというよりも、身につけたことは「考えること」だ。以前は疑問に思ったとしても、それをそのまま飲み込んだり、「私にはわからないけれど、それで正しいんだ

と考えること自体を放棄してきた。でも、大学に来てからはあまり人の評価を気にしなくなった(他人の評価はその人の資質や感情にも大きく左右されるということに気づいたから)。そしてこのゼミで自分を見つめるという作業を繰り返してきてきた。その作業を通して見栄のために考えるのではなく、自分のために考えれば楽しいんだということに気づいた。これはかなり大きな発見だった。(ゼミ生 A)

- ・私はこのゼミを通じて「深く自分と他人を考えること」を学んだ。私がこのゼミを選んだ理由は、日本語教師になるにせよ何にせよ、知識や技術・能力と同等に人とのつきあい方や偏りのない視点・幅広い視野も将来求められるのではないか?と思ったからであった。実際ゼミを通じてさまざまなテーマについて考えるうちに、少しは自分の価値観・枠にとらわれすぎないものを見方を身につけられたのでは…と思う。(ゼミ生 D)
- ・私は、今学期の教養ゼミを通じて、本当に多くのことを学ぶことができたと思っている。自己理解、他者理解、傾聴の訓練、肯定的感情、国際的な問題…など、様々なことを学んできた。その中でも私は、特に自分自身について深く考えることができたと思う。今学期の教養ゼミを通じて、今まで自分でも気がつかなかった自分を知ったり、他者との関係においての自分というものを見つめなおしてみたり、自分について他者に語るという経験をしてみたり、本当にいろいろな観点から自分自身について考えた。今までの私は人前で何かを話すというときにいつも緊張してしまって、うまく話せないという苦手意識みたいなものがあったのだが、ゼミを通じて、逆に人前で話すことが気持ちよいものであると感じられるようになり、とてもうれしく思っている。(ゼミ生 K)

4.2.2. 「自分を表現すること」を学んだ

- ・私は、自分のことを話したりするのは苦手なので初めは少し抵抗がありましたが、その中で自分を表現する力がついたかなと思います。(ゼミ生 B)
- ・今までは、ただ自分の思っていることをただ並べて発言していたのだが、少しずつではあるがどうやったら相手に納得してもらえるかということを考えて発言するようになった。つまり、論理的に発言する力を身につけつつあるということだ。いくら話しても、相手にわかってもらえなければ、何度言っても結果は同じである。(ゼミ生 H)

- ・私が教養ゼミで学んだことはたくさんある。まず一つ目は“自分の意見を言う”ということだ。これまで公(?)で自分の意見をいう機会がほとんどなかった。受験もあって深く人と話すこともなく、また物事について考えることもなかった。そんなときに常に自分で考えること、そして自分の意見を言うことを求められたので初めはかなりとまどった。自分から意見を言うのは小学校以来だったし。ゼミを通じて、人に自分の意見を言うことの難しさ、そして楽しさを体験した。今では、初めの頃より自分の意見を言えるようになった。(最初のうちは本当に言おうとするたびにかなり緊張していた。そうとう小心者なんです。今でも結構緊張しますが..どうにかしたい)(ゼミ生 J)

4.2.3. 「聴くこと」を学んだ

- ・自分の意見を伝えるのと同時に、人の意見を聞くということも重要であると思った。昔は、人が発言しているときに、次は何を言おうかなどと考えることが多かった。しかし、人の意見に耳を傾けることによって、「こういう考え方もあるのか」「この意見は使える」など、たとえその話には関係なくても、めぐりめぐって将来何かの役に立つかもしれない。自分でも、話の進め方が上手になっていくのが感じられたのが、大変うれしかった。(ゼミ生 H)
- ・とにかく人と話すという機会がほとんど無かったので、人の意見を聞くというのも久しぶりだった。人の意見を聞くのは発見がたくさんあって、「そういう考え方もあるんだ」「そこは私とは違うなあ」といろんなことを考えることができるようになったと思う。素直に人の言うことを聞けるようになったし(多分)、また反論もできるようになった。(ゼミ生 J)

4.2.4. 「自己理解」が深まった

- ・この教ゼミの時間はすごく好きでした。自己理解を深めるという、私にとってすごく興味のあるテーマで色々話せるので、とてもためになりました。個人的には、自分のことは8、9割分かっているつもりだったし、正直なところ自分についてはもう十分、という感じもしていたけど、なかなかどうして、他のメンバーの子たちの話を聞いてはっとすることも多かったです。(ゼミ生 F)
- ・「自分を見つめなおす」ことによって、私とはどういう人間で、これからどうしたいのかとい

うことを理解できた。やはり、自分のことは自分が一番分かっておくべきである。(ゼミ生 H)

4.2.5. 「人との関係作り」を学んだ

- ・このゼミでは、「人と接すること」について教えてもらったように思います。しかも実践的です。(ゼミ生 G)
- ・この授業では人との関係をたくさん学んだ気がします。私は精神的なことが苦手なので人が考えているということを考慮してというのは、頑張っても足りないところがあると思います。それで、人を傷つけたら嫌だなといつも思います。だけど、自分の気持ちを込めて人と接していったらいいなと思いました。(ゼミ生 B)

4.2.6. 「日本語教師の資質」を学んだ

- ・この教養ゼミを通じて学んだことは、「日本語教師としての理想的な人格とは何か」だと思う。それはきっと、「明るいこと」「物事に対して肯定的であること」「聞き上手であること」「自分の考えを伝えること」だろう。(中略)これらのことは、本当は日本語教師に限ったことではないと思う。人間として、こういうことができる人は魅力的だと思う。私がこのゼミで気がついたことはそれだ。「日本語教師」というのは、教える技術も必要だが、人間的な魅力もなければならないということである。「教える」という作業は、人間同士の関わりなのだという、一番基本的で忘れてはいけないことを学ぶことができた。そして、その「魅力」とは何か、普通は学校で学ぶことのできないことのヒントをこのゼミで教えてもらったと感じている。日本語教師としての技術を学ぶ機会はこれからもあると思う。しかし、日本語教師の心構えを学ぶ機会はほとんどないだろう。特に海外で一人で暮らすこともあるこの仕事は、人間としての基礎ができてないと海外に暮らすということだけで辛くなってしまおうと思う。(ゼミ生 I)

5. その他の感想

「各教室活動へのコメント」及び「学んだこと」以外にも、興味深いコメントが見られた。以下、内容別にコメントを紹介していく。

5.1. 自分が好きになった

- ・あと、もう一つ得られた大事なこと。今の自分

を前より少しだけ好きになった。きちんと認めてあげられるようになった。(甘くなったのだけかもしれないが)(ゼミ生 A)

- ・新たな自分を見つけ出すことによって、今まで自分を知っていた「つもり」だったというのと同時に、まだ自分には開拓の余地があるし、自分はこんなものじゃないと思えるようになった。きっと、私が自分のことを好きになれたのだ。自分を見つめなおすことによって、自分というものにますます磨きをかけるチャンスになるのだと考える。(ゼミ生 H)

5.2. 自己理解が、自己受容・他者理解・他者受容へつながった

- ・大学に入って特に思ったが、私にはもともとはっきりとした自我がないということにコンプレックスがあった。たわいない話や他人の話を聞いたり応援してあげることが得意なほうだと思うけど、自分が主体になって何かをしたり話したり主張したりするのは苦手なのだ。将来は国際的な仕事に就きたいと思っているだけに、そんな自分にますます負い目を感じていた。それでずっと、「将来は自分の意見を的確に述べて行動派の立派な大人になりたい、頑張ればなれる」と心のどこかで信じていた。でも実際はそんなに人は変わるものではない、むしろ弱点を個性として伸ばすということの大切さをこのゼミで教わった。皆で自分のことについて語り合ったり、相手の長所を言い合ったりする機会というのは今まで意外になく、自分の良い所を皆に言われたときは恥ずかしかったけど、とても嬉しかった。また他の人たちと比べると、自分はこんなにもみんなと違うということに気づかされて、「私ってこう見ると個性がなくはないな」と実感した。全然違うもの同士と一緒に楽しく過ごせるなんてすごいと思った。今までは自分に無い物ばかりを欲しがっていたが、きっとこのわがままな夢は叶えられたとしても、また次の夢が現れて最終的に満足することはないと思う。自分を受け入れられるということこそが自分に自身が持てるようになるために必要なのではないかと気づかせてもらった。とはいっても、これからずっと何らかの目標をもって生きていきたいと思う気持ちは変わらない。いつでも何かに頑張っている人は素敵だし、何より夢を持って過ごすことは楽しいからだ。(ゼミ生 C)

- ・自分自身について、他者の理解・他者との関係。これらのことは、日本語教育においても非常に重要なポイントとなる事柄である。日本語教師として、自分自身を深く理解しておくことが必要であると思うし、他者である日本語学習者のことも理解する必要があるだろう。そして、その相互理解によって、お互いの信頼関係が生まれるのだと思う。この「人間理解」の能力が、ゼミを通じて少しはついたのではないかと思う。これから先、この能力をもっともっと伸ばしていけるように、努力していきたいと思う。(ゼミ生 K)

5.3. 発見が多かった

- ・とにかくこの授業では発見が多くて、得られたものもたくさんあったと思う。授業の内容からもあったし、先生の話からも、そして教養ゼミのメンバーみんなからいろんなことを吸収できた。これからはこの授業で学んだものをフル動員して生きていきたい。(ゼミ生 J)

5.4. 少人数の意見交換がよかった

- ・大学の授業というと、たくさんの学生がいて先生がひたすら話すものだと思っていたが、このように少人数で意見を交換し合うという授業形態だからこそ、将来一番必要だと思われる2つの要素「自分を見つめなおすこと」そして「自分の意見を伝えること」を学ぶことができたのだと思う。この先、どんな人生を送るかわからないが、この教養ゼミで学んだことがきっとどこかで生かされると思う。(ゼミ生 H)

5.5. 「深く考え学ぶこと」が身近なものになった

- ・教科書やノートに詰め込まれた知識にも学ぶべきことはたくさんあるけれど、自分が人と関わって体験した出来事やそれについて考えたこと、また他者の経験談など私たちのまわりの日常生活あらゆる場所に、学ぶべきことが存在しているのだ。「深く学ぶ＝深く考えること」が私にとって身近なものとなったことは教養ゼミのおかげである。日本語教師になるためというより、一人の人として社会の輪の中で生きていくための心構えを教わった4ヶ月間だった。(ゼミ生 D)

5.6. 価値基準を相対比較できるようになった

- ・よく出たトピックが「人生を語る」でした。人生は一人で「考える」とロクなことになりません。多くの人と一緒に人生を「語りあう」ことは素晴らしいことだと実感しました。生きていけると、つい自分のモノサシで周りを見てしまう

ものです。しかし他人の人生を知ることによって、自分の考えだけがものごとの基準ではない、と考えられるようになったことはゼミの大きな収穫でした。大学四年間のスタート段階で、これらのことを学べて良かったです。しっかり活用していきます。(ゼミ生 G)

6. おわりに

以上、教師の資質の一つである「人間性」の向上を目指し、構成的グループ・エンカウンターを導入した教養ゼミの授業内容とそれに対するゼミ生の反応を紹介してきた。ゼミ生のコメントを読んでもみると、「人間性」の中でも特に「自己理解」「自己受容」「他者理解」「他者需要」に焦点を当てた今回の試みは、まずは成功であったと結論付けられそうである。前述したとおり、教師育成のカリキュラムの中に「人間性」向上のための授業や活動が組み込まれることは稀である。しかしながら、教師教育者が任務を全うしようとするのであれば、「専門性」や「自己教育力」だけにとどまらず、「人間性」の向上にも貢献すべきである。そのためには、各教師志望者の日常の努力に任せるだけでなく、「人間性」向上のための様々な方法にチャレンジしてみることが、教師教育者には求められる。本研究の試みは、そのひとつに過ぎない。

構成的グループ・エンカウンターを実施して感じたことが、実施運営上の教師教育者の役割の大きさである。「どのような言葉を用い、どのような表情で、どのような声のトーンで語り語り掛けていくか」そして「ゼミ生の発言をどう取り上げて、ゼミ全体に共有し、そこからどう進行していくか」によって、ゼミ生の話し合いの深まりも、そしてその結果としての内省の深まりも大きく影響を受けていたようである。であるとすれば、教師教育者にはいわゆる「コミュニケーション能力」が必要な資質として求められていることになる。今後は教師教育者に求められる資質についても研究を進めていきたいと思う。

注

- 1) 國分 (1997, 1999a, 1999b) を参照。
- 2) ジョハリの窓モデルについて詳しくは、縫部 (2001b: 110-112) を参照。
- 3) 詳しくは横溝 (2000: 115-133) を参照。

参考文献

- 足立司郎 1999 「聞いてもらえる喜び」 國分康孝監修 『エンカウンターで学級が変わる (高等学校編)』 図書文化 pp.68-71.
- 飯野哲朗 1999 「支えられている私」 國分康孝監修 『エンカウンターで学級が変わる (高等学校編)』 図書文化 pp.90-93.
- 植西聰 1988 「運命を変える成功法則111のヒント」 成美文庫
- 大池公紀 1999 「照れずにほめジョーズ」 國分康孝監修 『エンカウンターで学級が変わる (高等学校編)』 図書文化 pp.162-165.
- 大串清 1999 「私の親しみやすさは？」 國分康孝監修 『エンカウンターで学級が変わる (高等学校編)』 図書文化 pp.100-105.
- 大橋敏子・近藤祐一・秦喜美恵・堀江学・横田雅弘 1992 『外国人留学生とのコミュニケーション・ハンドブック：トラブルから学ぶ異文化理解』 アルク
- 岡田弘 1997 「エクササイズ実践マニュアル」 國分康孝監修 『エンカウンターで学級が変わる (中学校編)』 図書文化 pp.12-15.
- 岡田弘 1999 「構成的グループエンカウンターとは」 國分康孝監修 『エンカウンターで学級が変わる (高等学校編)』 図書文化 pp.10-13.
- 加藤諦三 1993 『続アメリカインディアンの教え：あなたの幸せがここにある』 ニッポン放送出版
- 國分康孝 1982 『教師の表情：ふれあいの技法を求めて』 瀝々社
- 國分康孝監修 1997 『エンカウンターで学級が変わる (中学校編)』 図書文化
- 國分康孝監修 1999a 『エンカウンターで学級が変わる (高等学校編)』 図書文化
- 國分康孝監修 1999b 『教師と成人のための人間づくり・第5集：構成的グループ・エンカウンター集』 瀝々社
- 鈴木敏城 1999 「人生を意識しよう」 國分康孝監修 『エンカウンターで学級が変わる (高等学校編)』 図書文化 pp.116-120.
- 高野利雄 1997 「ボランティアシップ」 國分康孝監修 『エンカウンターで学級が変わる (中学校編)』 図書文化 pp.150-153.
- 縫部義憲 2001a 「日本語教師の成長プログラム」 『大学日本語教員養成課程において必要とされる新たな教育内容と方法に関する調査研究報告書』 日本語教員養成課程研究委員会 pp.21-28.
- 縫部義憲 2001b 『日本語教育学入門』 瀝々社
- 富士盛公年 1999 「6人の人生」 國分康孝監修 『エンカウンターで学級が変わる (高等学校編)』 図書文化 pp.166-169.
- 横溝紳一郎 2000 『日本語教師のためのアクション・リサーチ』 日本語教育学会編 凡人社
- 横溝紳一郎 2002 「日本語教師の資質に関する一考察：先行研究調査より」 『広島大学日本語教育研究』 広島大学大学院教育学研究科 pp.49-58.